

プロジェクト型学習としての広島大学のオペラ制作

—オペラ「魔笛」の制作における指導者の働きかけに着目して—

大野内 愛

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

伊藤 真

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

枝川 一也

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

Opera Production at Hiroshima University as Project-Based Learning: Focusing on the Instructor's Approach to the Production of "The Magic Flute" Opera

Ai OONOUCHI

Shin ITO

Kazuya EDAGAWA

Abstract

This study aims to analyze the relationship between the instructor's approach and the students' thoughts during the process of opera production at Hiroshima University to understand the actual situation of opera production and explore effective ways of teaching and supporting the students. After an overview of the entire opera production process, the analysis focused on the music rehearsal process. The results of the study showed that in engaging in opera production as music learning, there were two approaches based on learner understanding. The first is "a work that promotes complex learning about the various elements that make up an opera." The interconnectedness of the various elements is a special characteristic of opera as a comprehensive art form. The second is "to further enrich the thinking that is constantly taking place within the learner's own mind in the performance and production of the work." The purpose of these efforts was to provide the student the opportunity to learn as an all-rounder who can look at the whole picture, as well as to learn as an expert in a certain field. While these efforts were made by the instructor, the learners were less interested in elements that were not directly related to them, and their learning was biased toward expert learning. In the project-based learning approach at the university, it is necessary for students to learn as all-rounders who generate their own learning from the way others learn. Because of the unique nature of opera, with its complex intertwining of various elements, being aware of others' learning and one's own learning is equally important for students. Thus, the study results showed that it is necessary to work not only on the project-based learning characteristic of opera production, but also on the way of learning itself, in order to "construct learning as an all-rounder."

1. 研究の背景と目的

プロジェクト型学習とは、20世紀初頭の初等教育におけるキルパトリックの「プロジェクト・メソッド」

にルーツがあると言われ、現代のアクティブラーニングの1つとした文脈から「プロジェクト学習とは、実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習のことである。学生の自己主導型の学習デザイン、教師のファシリテーションのもと、問題や問い、仮説などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身につける」(溝上 2016, pp.10-11)と定義されている。そしてその学習環境の特徴としては、①実行可能で学習内容として価値のあるドライビングクエスチョンが存在すること、②ドライビングクエスチョンをクリアするためのそれぞれの学びそのものについて学習目標と評価があること、③教育や学習という枠組みに入っていないながら、オーセンティックな実践への参加によって取り組まれること、④教師、学生、その他の人たちの関わりの中で、共有された理解を構築し、その専門領域の性質について理解するための協調がなされること、⑤ドライビングクエスチョンに取り掛かる上でさまざまなテクノロジーによるツールを用いること、⑥学習から導き出されたアーティファクトとしての成果物があること、とされている(ソーヤ 2016, pp.17-35)。

本稿では、プロジェクト型学習としての広島大学のオペラ制作に焦点を当てる。本来であればオペラ制作とは、演出家のプランのもとにキャストや照明、衣装など、それぞれが自分の役割に従事し、それらを組み合わせることによって創り上げられるものである。しかしながら広島大学でのオペラ制作は、演出家を置かず、学習者たちが多様な役割を関連させながら試行錯誤してオペラを制作していく。こうした広島大学でのオペラ制作をプロジェクト型学習の文脈でみると、まずオペラ作品を制作するというドライビングクエスチョンからスタートし、仲間、指導者、外部関係者などとの関わりの中で共有された理解を構築していく。オペラ制作の手法はプロによる実践とほぼ同じであり、それを知り、実践していく学習そのものが目標となる。

これまでの筆者らの研究においては、オペラ制作における学習者の試行錯誤のプロセスの特徴と、活動を支える要因について明らかにしてきた。その中でオペラ制作という学習は、どのように人と協力するか、どのような道具を使って作業するのか、といったオペラを完成させるための方法の模索にとどまらず、オペラ作品としてもっとレベルを上げたいといったクオリティを追求する場面で、学習者の自発的な試行錯誤の姿が見られた(大野内ら 2021)。作品のクオリティを追求するとき、学習者自身の力だけではできないという状況下において、他者の力を借りることにより、自分の限界以上の成果を体験することができる。本稿では、その「他者」の1つとして、指導者による働きかけに焦点を当てる。

以上より、オペラ制作のプロセスにおける指導者の働きかけと、学習者の思いの関連を分析することにより、その有り様を捉え、効果的な指導・支援のあり方について探ることを本稿の目的とする。なお、分析にあたっては、オペラ制作のプロセス全体を概観した上で、音楽稽古に焦点化していくこととする。

2. 対象とする活動の概要

広島大学教育学部音楽文化系コースには、専門科目として「オペラ実習」という科目が、前期・後期それぞれ開講されており、毎年4月と11月のオペラ公演に向けて活動している。単位不要で参加する学生も多く、毎回30名ほどの参加者がいる。参加方法は、キャストやピアニストはもちろんのこと、大道具、小道具、衣装、メイク、照明、広報などどのような役割でも可能であり、さらに複数の役割を担う学生も多い。前述の通り、演出家を置かず、学習者全員で演出を考えるのも特徴の1つである。

本稿では、「オペラ実習」の中で、2022年4月の野外オペラ公演に向けた活動を対象とする。なお演目はW.A.モーツァルト作曲「魔笛」で、日本語の訳詞による上演を行った。公演までの大まかな流れは、参加者決定・演目の発表、音楽稽古、立ち稽古、最終調整、本番であり、これと並行して大道具、小道具の準備などの作業が行われていく。

3. 各制作段階における指導者の意図と学習者の思い

ここでは、各制作段階における指導者の意図と、学習者の思いを分析する。指導者の意図については、筆者らが授業担当者として感じていることをもとに示し、学習者の思いについては、公演終了後のアンケート(自由記述)をもとに概観する。公演終了後のアンケートとは、前述の5つの各段階(参加者決定・

演目の発表、音楽稽古、立ち稽古、最終調整、本番)において、それぞれ考えたこと、感じたことなどを自由に記述させる形式で行った。回収数は19である。

3.1. 指導者の意図

指導者は、音楽文化系コースが教育学部であることから、オペラ制作をとおして将来教育現場で活躍することのできるような人材育成を目指している。

その中でまず「参加者決定・演目の発表」の段階では、学習者らに対して「オペラ実習」という授業の目的と理念、オペラの歴史や作品のレクチャーを行うことにより、学習者の学びや活動への意欲喚起をねらっている。次に「音楽稽古」の段階になると、音楽や歌詞に関する指導はもちろんのこと、作品の概要説明をしたり、演出や演技、キャラクター理解のための指導をしたりして、楽譜から作品の全体像に迫ろうとしている。「立ち稽古」の段階では、キャラクター理解をふまえた、演技や演出の指導を行うことにより、作品を構成する各パーツのつながりの理解を促し、作品を作り上げることをねらっている。「最終調整」の段階では、オーセンティックな視点から作品を仕上げることはもちろんのこと公演の運営に関する指導も加えながら、よりよい作品、よりよい公演に向けた指導を行っている。

3.2. 学習者の思い

学習者の各段階の思いをまとめ、内容ごとにコーディングしたものの関連を下記に示す(図1)。

各段階での思いとしては、まず「参加者決定・演目の発表」の段階では、作品の配役への期待感、そして作品に取り組む上での不安感をもってスタートしている。そして「音楽稽古」の段階では、音楽、日本語訳詞の扱い、その作品らしい表現に関する不安のほか、時間的な不安などを抱えている。「立ち稽古」の段階になると、キャラクターの確立に向かいつつ、進捗や係の仕事の進捗など、活動そのものへの不安が大きくなっている。また音楽面では表現の工夫の試みもなされていた。「最終調整」の段階では、動きや音楽、キャラクター像への不安が見られた。どの段階においても、常に不安が付きまとっている姿が想起される。

さらに、精神的な面に着目すると、活動のモチベーションはさまざまな要因で向上したり低下したりしているが、最終調整の段階においては、多くの学習者が本番直前の精神的な高まりを感じていた。

作品に対する関係では、作品の理解からスタートし、作品への接近、さらにはメッセージ性の咀嚼へと進んでいった。

「本番」の公演を終えた後には、これらの思いが達成感、安堵感、疲労感、そして反省や課題の発見につながったようである。

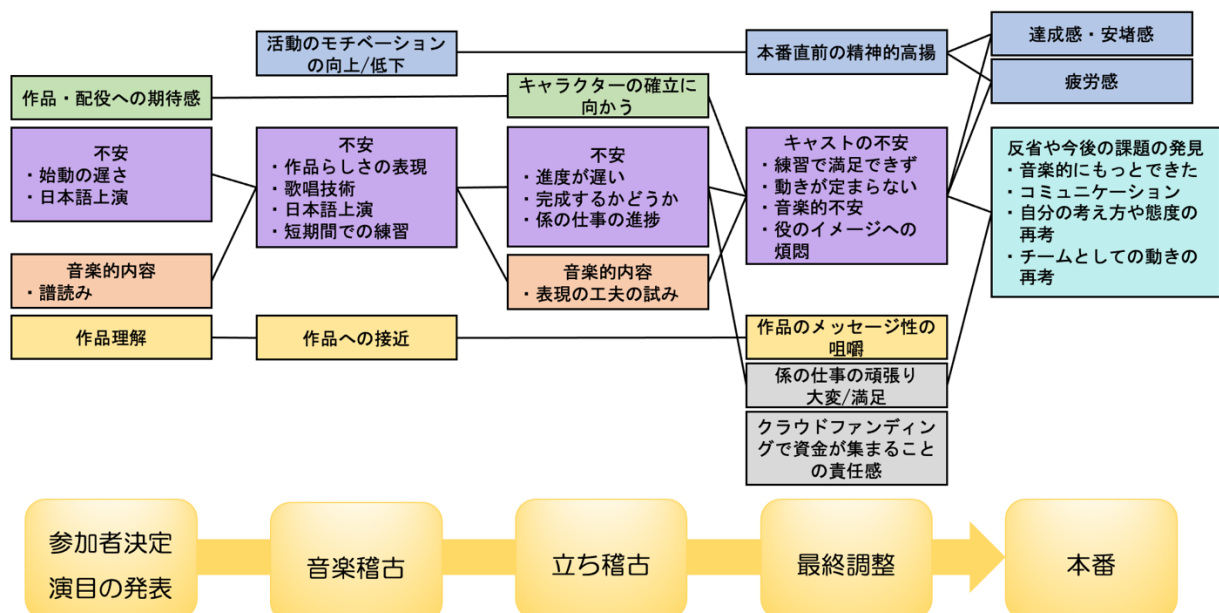


図1 各段階の学習者の思い

4. 音楽稽古に着目した分析

ここでは、音楽稽古に焦点化し、指導者の働きかけ（教授内容）の実際と学習者の思いを詳細に見ていく。音楽稽古は、段階としては活動の初期から中期に当てはまり、音楽を理解しながら、作曲家や作品らしさ、演技、演出までを思考していくという非常に重要な時期で、オペラ制作の基盤となる部分である。

4.1. 音楽稽古の概要

1回の音楽稽古では、2～4場面のレッスンが行われる。その場面に直接的に関係するキャストやピアニストのみでなく、「オペラ実習」に関係しているすべての学習者がレッスンを聴講する形をとっている。

4.2. 分析の対象と手順

①指導者の働きかけ（教授行為）

音楽稽古を実施した記録をもとに、指導者の働きかけ（教授行為）の分析を行う。対象とする記録の概要は下記のとおりである。音楽稽古を録画したものをもとに、その言動をテキストデータ化する。帰納的主題分析の手法を用いて、テキストをコーディング・グループ分けし、各グループに主題（テーマ）をつけていく。

日時：2022年2月15日（火）13:00～18:00

内容：「魔笛」No.21-2, No.21-3, No.2, No.17の場面の音楽稽古

※全体としては3回目の音楽稽古であるが、この日に扱う各場面の音楽稽古は初めて。

②学習者の思い

「3.2. 学習者の思い」で用いたデータの中で「音楽稽古」の部分の記述をテキストデータ化し、帰納的主題分析の手法を用いて、テキストをコーディング・グループ分けし、各グループに主題（テーマ）をつけていく。

4.3. 結果

4.3.1. 音楽稽古における指導者の働きかけ（教授内容）の分析結果

音楽稽古における指導者の言動を分析したところ、主に6つの主題を導き出すことができた（表1）。

1つ目は【作品への接近】と名づけた。「音楽の中でモーツァルトの存在ってどんなことなんだろう」、「いい男とかそうじゃなくて、もうちょっと地に這ってて欲しいんだな」など、指導者の経験に基づいたモーツァルト、魔笛、台本、場面、キャラクターについての言動であり、モーツァルトの音楽やキャラクター像に関する内容や、モーツァルトの作品を扱うモチベーションを学習者と共有しようとしている。

2つ目は【オペラの基本】とした。これは「オペラなんて嘘だから」「あたかもそこにいるかのように見せるしかないんだよ」などという、一般的なオペラにおけるリアリティのある演技への接近や、アンサンブルの基本的な内容についての言動である。

3つ目は【日本語訳詞での歌い方】とした。「魔笛」の原語の歌詞はドイツ語であり、それを日本語訳詞で歌唱するためには、日本語の語感を活かした楽譜の読み替えが必要となる。これは「原語にあたってもらえるとは少し何か見えてくる」「（日本語の語感に合わせて）弱拍を強拍と捉えていくとね」など、日本語訳詞による歌詞で効果的に演奏するための内容である。

4つ目は【歌唱表現・音楽表現】とした。これは「声帯は使うんだけど」や「3拍目、4拍目みたいなのところがあんまり立ち止まらないように」といった、指導者の経験に基づいた歌い方や音楽表現などに関する内容である。声楽的な内容としては、脱力した歌い方や、声帯の使い方、ブレスの取り方などがあり、音楽表現に関する内容としては、さまざまな旋律の歌い方や、テンポの感じ方、音楽的構造の説明などがあつた。

5つ目は【演出・演技への思考の促し】とした。「夜の女王を最後どうするのかね」「どんな格好するの」など、演技やオペラを構成するさまざまな要素について思考させるものであり、照明、衣装、小道具などの提案も含まれた。

6 つ目は【評価】とした。学習者の意欲と演奏技術を向上させるための評価や、精神的な励ましに関する言動で「いいじゃないか」「さっきの方が良かったね」などの発言があった。またここには、練習方法の提案などを含んだ評価もあった。

音楽稽古の中で、演奏に関する内容以外にもさまざまな要素を織り交ぜており、それぞれ自分自身の役割を中心としながらも複合的に学んで欲しいという指導者の意図が確認できた。

表 1 指導者の働きかけ（教授内容）の主題分析

主題	定義	具体例
1. 作品への接近	指導者の経験に基づいたモーツァルト、魔笛、台本、場面、キャラクターについての言動	「これで身につけてほしいことは、モーツァルトってなんだろう？音楽の中でモーツァルトの存在ってどんなことなんだろう？って」 「偉い役とか、いい男とか、そうじゃなくて、もうちょっと地に這ってほしいんだな」
2. オペラの基本	一般的なオペラにおける演技やアンサンブルの基本的な内容についての言動	「まずは自分で想像しないとさ。オペラなんて嘘なんだから。もちろん着るものとか大道具とか明かりとかでその感覚は作るんだけど、一番大きなことって、あたかもそこにいるかのように見せるしかないんだよ」
3. 日本語訳詞での歌い方	日本語訳詞による歌詞で効果的に演奏するための言動	「原語にあってもらえると少し何か見えるものがある」 「これは森の奥にて～だから、弱拍を強拍と捉えていくとね」
4. 歌唱技術・音楽表現	指導者の経験に基づいた歌い方や音楽表現の理論とイメージに関する言動	「体で支えをしていきながら「♪パミーナ」って感じかな。声帯は使うんだけど流れの中で言ったらいいと思う」 「自分が楽器だから、楽器を囲めないこと」 「進行性かな。ピアノもだから、3拍目、4拍目みたいところがあまり立ち止まらないように」
5. 演出・演技への思考の促し	演技や、オペラを制作する上で必要な各係の仕事内容について思考させる言動	「夜の女王を最後までするのかねっていう話もあって。本当に地獄に落とすかどうかって。それをまたみんなで考えていたらなって」 「森の中なら木漏れ日があつてさ」 「どんな格好するの？」
6. 評価	学習者の意欲と演奏技術を向上させる評価や精神的励ましに関する言動	「いいじゃないか、そんな感じ」 「さっきの方がよかったね」 「最後まで少しだけ拡大できる？今、少しだけ減衰するかな」

4.3.1.1. 教授行為からみる指導者の働きかけ

指導者がどのような教授行為を用いて、上記6つの内容を働きかけたのかを表2に示す。指導者の教授行為は、「説明」「質問」「指示・モデル」「提案」「課題の指摘」「評価」の6つに分類することができた。

特徴的な部分を見ると【日本語訳詞での歌い方】や【歌唱技術・音楽表現】に関しては、「このように歌ってください」と具体的な言葉で指示し、実際に歌ってお手本を示すといった「指示・モデル」を多用して、感覚的な理解の促しをしている。一方で、作品や作曲家など【作品への接近】については、かなりの言葉を使って理論的な「説明」がなされていた。

表 2 教授行為での分類とその数

	教授行為（重複あり）						合計
	説明	質問	指示・モデル	提案	課題の指摘	評価	
1. 作品への接近	21	5					26
2. オペラの基本	6		6				10
3. 日本語訳詞での歌い方	7		24				27
4. 歌唱技術・音楽表現	9	1	68	3	2		76
5. 演出・演技への思考の促し	3	10	9	29	1	1	46
6. 評価	2		3	5	10	18	34

また、【演出・演技への思考の促し】については「提案」という教授行為を多用している。プロのオペラ制作においては、演出家のプランを実現していくことになるが、「オペラ実習」でのオペラ制作においては、学習者たちそれぞれが演出について思考できるよう配慮されている。

4.3.1.2. 学習者理解に基づく指導者の働きかけ

指導者の教授内容、教授行為は、学習者の特徴によってその傾向が異なる。

例えば学習者 A は、トランペット専攻から声楽専攻に変更したこともあり、人前でのパフォーマンスが苦手であり、そして学習においては、ヒントを与えると自分で考えることのできる学習者であった。そういった特性をもつ学習者 A に対して指導者は、特に演技への指導を中心としながら「嬉しい嬉しい!」「鳥ってこんな感じじゃない?」などと指導者自身がピエロになりながらテンションを上げて、学習者の羞恥心を捨てさせるような声かけをしたり、「このタカタンタカカカっていう前奏の音楽って、どんな動き?」など演技を考えるためのヒントとして音楽をしっかりと読んでいくことを伝えたりしていた。

また学習者 B は、声楽専攻だが自分の歌に自信がなく、否定的な発言を多くしてしまう姿があった。他者の意見は素直に受け入れることができるが、多くの情報を処理したり応用したりすることの苦手な特性がある。こうした学習者 B に対し、指導者は「いいよいいよ」「できるよ」といった肯定的評価を多用し、「こんなふうに歌ったらいいよ」というように実際に指導者自身が歌ってモデルを示すという方法を多く用いていた。

学習者の特性を理解した上で、指導者はそれぞれの課題に応じた働きかけの工夫をしている様子が確認できた。

4.3.2. 音楽稽古における学習者の思いの分析結果

音楽稽古についての学習者の記述を分析したところ、5つの主題を導き出すことができた(表3)。

1つ目は【演奏技術や表現法に起因する不安や困難】と名づけた。これは「重唱だったからとても不安」「日本語の歌詞でドイツ語の曲を歌うのが難しい」など、自身の演奏課題や困難の自覚に関する内容である。

2つ目は【時間的制約に起因する不安】とした。これは「この曲数をいつもより短期間で仕上げなければならないことがプレッシャー」など、時間的制約やレッスンの少なさへの不安に関する記述である。

表3 音楽稽古における学習者の思いの主題分析

主題	定義	具体例
1. 演奏技術や表現法に起因する不安や困難	自身の演奏課題や困難をどのように自覚しているかどうかの記述	「重唱だったこともあって、とても不安だった」 「割と合わせやすい曲ではあったが、モーツァルトらしい軽快さを出すのが難しい」 「歌の技量が不十分と感じ、発声などを重点的に練習した」 「日本語の歌詞でドイツ語の曲を歌うのが難しい」 「言葉を伝える工夫をいつも以上にしようと気をつけた」
2. 時間的制約に起因する不安	時間的制約(練習時間の短さ、レッスンの少なさ)に関する記述	「この曲数をいつもより短期間で仕上げなければならないことがプレッシャー」 「なかなか歌の作り方を見ていただける時間がなかった」
3. 作品への接近	音楽経験に伴って作品に対する自己効力感や親近感が高まっている状況に関する記述	「前回のジャンニ・スキッキより譜読みが早く終わったかな、と思う」 「モーツァルトの作った世界観や音楽、エドワードさんの歌詞に親しみを感ずるようになった」
4. 他者との関係	他者との関わりの中で認知される感情に関する記述	「今までより多くの人と関わったのはよかった」 「人が集まらなくてなかなか音楽合わせができなくて焦った」 「一部の出席率の悪さと進捗に腹が立った」
5. 活動へのモチベーション	活動を進める中でモチベーションが向上・低下したことにに関する記述	「やる気なく、ダラダラと取り組んだ」 「係も動き出そうにも、全体での大枠があまり定まっていないこともあり、なあなあで行うことが多かった」 「クナーベのみんな、やる気、行動力、元気に満ち溢れていて、自分も置いていかれないように頑張らねばと思う」

3 つ目は【作品への接近】とした。これは「モーツァルトの作った世界観や音楽、また日本語の訳詞に親しみを感じるようになった」など、作品に対する自己効力感や親近感が高まっている状況に関する記述である。

4 つ目は【他者との関係】とした。これは「多くの人と関わったので良かった」「人が集まらなくて、なかなか音楽合わせができなくて焦った」など、他者との関わりの中で認知される感情に関する記述である。

5 つ目は【活動へのモチベーション】とした。これは「係で動き出そうにも、全体での大枠があまり定まっておらず、なあなあで行った」「みんながやる気や元気に満ち溢れていて、自分も頑張らねばと思う」など、活動へのモチベーションが向上したり低下したりしたことに関する記述である。

5. 指導者の働きかけが学習者に与える影響と課題

指導者の教授内容に関する 6 つの主題と、学習者の思いに関する 5 つの主題の関係を図 2 に示す。

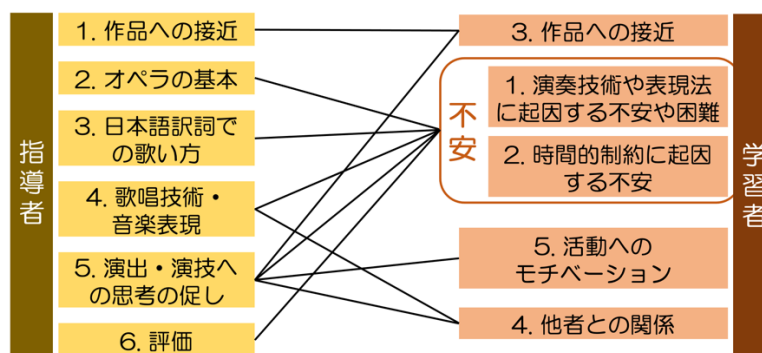


図 2 指導者の働きかけと学習者の思いの関係

5.1. 影響

指導者の働きかけが学習者に与えている影響を見る。

まず作曲家、作品に関する指導者の説明により、学習者は作品への親近感をもつようになっていた。そもそも学習者は音楽学習における演奏や作品づくりにおいて、指導者がいなくとも自分の能力や作品の難易度などから不安を感じるものであるが、オペラ制作の中で指導者から「このモーツァルトのビート感は…」などと揺さぶりがあり、学習者はさらに自分の困難を認知し、思考が揺さぶられていた。そしてこうした思考の揺さぶりにより、学習者には不安という形で課題意識が芽生え、作品への探究が始まっていた。

一方、このように課題意識が芽生えて探究が始まったのは、その場面やその仕事に直接関係するような学習者であり、自分には関係ないと認識しているその他の学習者の学びにはつながっていなかった。「歌の作り方を見てもらえる時間があまりなかった」など、直接的な指導が少ないことへの不安を記述しており、他者への指導を自分の課題に繋げることができていない状況があった。

さらに、演出・演技に関する指導者の働きかけは、学習者を作品に近づけている一方で、「この時期は停滞気味だった」などと学習者が振り返っていることから、演奏者以外の各係の活動のモチベーション向上にはつながっていなかった。

人間関係の面からは、探究をはじめた学習者が、モチベーションが低下している他者に対して「出席率の低さに腹が立った」など批判的な意識を生む様子も見られた。

5.2. 指導者の働きかけのあり様と課題

音楽学習としてのオペラ制作においては、学習者理解にもとづいた 2 つの働きかけがあった。

1 つ目は「オペラを構成するさまざまな要素についての複合的な学びを促進する働きかけ」である。さまざまな要素が関連しあっているということは、総合芸術であるオペラの特長でもある。演奏の指導の中で、衣装や照明など、さまざまな要素を複合的に学んでいくための働きかけが存在していた。

2 つ目は「演奏や作品制作において恒常的に学習者自身の中で行われている思考に、さらに負荷をかけ

る働きかけ」である。音楽作品の制作においては、例え指導者がいなくとも、より良い演奏、作品を追求する上で、学習者の中で必ず思考が揺さぶられている。それに加え、指導者がさらに思考の揺さぶりという負荷をかける働きかけが存在していた。

以上のように、オペラ制作というプロジェクト型学習に特徴的な働きかけが行われていた様子を捉えることができた。その働きかけの意図は、ある分野へのエキスパート的な学びとともに、全体を俯瞰できるようなオールラウンダーとしての学びを保障することであった。

こうした指導者側の働きかけがある一方で、学習者は他の分野や直接的に指導されていること以外の要素についての関心が低く、他者の学びを自分の学びとして吸収・転化することができていない状況があり、結果的にエキスパートを生み出す側面が強調されていた。

音楽学習において、クオリティを追求する上では、エキスパートとしての学びは必要不可欠なものである。それに加えて、プロのオペラ制作とは異なる、大学でのプロジェクト型学習としての取り組みでは、他者の学ぶ姿から自分の学びを生成するようなオールラウンダーとしての学びも必要となる。オペラはさまざまな要素が複合的に絡み合っているという特殊性をもっているからこそ、自分とは違うことをしている人の学びを自分の学習として意識化する必要がある。

以上のことから、オペラ制作というプロジェクト型学習に特徴的な働きかけにとどまらず、「オールラウンダーとしての学びを構築する」ための、学び方そのものへの働きかけが必要であるという課題を見出すことができた。

引用・参考文献

- 大野内愛・伊藤真・樋口史都・枝川一也（2021）「学習者の語りからみるオペラ制作の試行錯誤—COVID-19 パンデミック下での活動に着目して—」『音楽学習研究』第 17 号， pp.1-12
- 溝上慎一・成田秀夫（2016）『アクティブラーニングとしての PBL と探究的な学習』東信堂
- ソーヤー, R. K. (編) 大島純ら (監訳) 望月俊男ら (編訳) (2016) 『学習科学ハンドブック 第二版 第 2 巻』北大路書房

付記

本研究は JSPS 科研費 JP22K02549 「教員養成におけるプロジェクト型学習でのオペラ制作の体系化」の助成を受けたものです。